



1. 目的

大規模災害時に外国人住民への対応を直接行う市町村・市町国際交流協会職員等を対象に、「多文化防災」の視点から災害時の外国人支援活動について学ぶ講座で、災害時の外国人支援に関する基礎知識や、避難所における外国人被災者への対応方法及び避難所運営のポイントを学ぶことを目的に実施しました。

2. 開催概要（実践講座） ※事前にオンデマンド講座を配信

- (1) 名称 令和6年度災害時外国人支援活動講座
- (2) 開催日 令和7年1月23日(木) 午後1時から午後4時30分
- (3) 会場 犬山市民交流センターフロイデ
- (4) 主催 愛知県、犬山市（共催）
- (5) 参加人数 44名（内犬山市役所職員27名）
- (6) 受託者 認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード

3. 経緯

令和6年3月から4月にかけてに愛知県が企画し県内全市町村に対し、実施意向調査を行いました。令和5年度は西尾市で実施された事業。

当市においても、令和6年1月1日の能登半島地震や、令和6年5月にブラジルで発生した豪雨災害の影響で、犬山市内の外国人市民の一部に防災に対する意思が高まっていることから、防災交通課と連携し2課合同でエントリーしました。

最終的に当市が採択され、上記日程で実践講座を県市共催で開催しました。

4. 講座プログラム

(1) オンデマンド講座（2024年12月16日(月)から2025年3月21日(金)）

①災害時外国人対応と日頃の取組

NPO法人多文化共生リソースセンター東海 土井佳彦氏

②避難生活支援のポイント

認定NPO法人レスキューストックヤード 栗田暢之・浦野愛

③平常時からの連携の大切さ

NPO法人外国人ヘルプライン東海 後藤美樹氏

④外国人住民の状況と愛知県の取組

愛知県多文化共生推進室

⑤犬山市の多文化共生

犬山市 多様性社会推進課

(2) 実践講座

①講義「避難所運営のポイント」

認定NPO法人レスキューストックヤード 常務理事 浦野 愛

②グループワーク「気づく力」「整える力」「つなぐ力」を身に着ける



5. 参加職員に対するヒアリング内容まとめ

課題

1. 言語やツールの問題

- ポケットークに頼りすぎる傾向があり、翻訳機がない場合の対応策が不十分。
- 外国人避難者との意思疎通において身振り手振りややさしい日本語の工夫が必要。
- 小道具（地図や多言語ボード）の活用が事前に説明されていない。

2. コミュニケーションの難しさ

- 被災者の要望を正確に聞き取ることや寄り添った対応が難しい。
- 外国語対応に慣れていないため、ストレスや混乱を感じた。

学び

1. コミュニケーションスキル

- 相手の目線を合わせ、自己紹介をすることで安心感を与えられる。
- 観察力や思いやりを持ち、身振り手振りや簡単な言葉で伝える重要性を認識した。
- 多言語掲示や視覚的な工夫が避難者の安心感につながる。

2. 研修の有効性

- 実際に外国人と接することで、言葉の壁や避難所の課題を実感できた。
- グループワークを通じて、様々な視点や意見を共有できた。
- 避難所での寄り添い方や被災者支援の基本的な知識が身についた。

3. 講座を経て有効だと考えられるもの

- 事前のデモンストレーションや目的の明確化が必要。
- 翻訳機に頼らず、多言語ボードや地図（言語を示す）を活用する訓練の導入。

上記のことから、この研修を通じ、避難所対応の重要性と改善点が明確になり、日頃からの準備が必要だと再認識できました。

上記以外に講座の運営に対しての意見が多くありましたが、今回は、実際に災害が発生したら、目的も事前の想定も無い中、現場対応をしなければならないというようなことを考え、シナリオ等を用意せず、協力いただいた4名の外国人市民の方にも、母国語だけで話してもらうというやり方で実施した部分がありました。

運営側として感じたこととして、明日震災が起きた場合、市職員の多くが、避難所等の避難者受入の現場に配属されても外国人（言葉が通じない人）への対応ができないのではと感じました。

今後防災担当とも協議をしながら、その課題をどう解消していくか取り組む必要があると感じました。

当日の様子

